

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 19日現在

機関番号：23401
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520028
 研究課題名（和文）12世紀論理学諸学派研究

研究課題名（英文） Studies of schools of logic in the 12th century

研究代表者

岩熊 幸男（IWAKUMA YUKIO）
 福井県立大学・学術教養センター・教授
 研究者番号：10135600

研究成果の概要（和文）：12世紀論理学著作のうち現存するもの（大部分が未刊である）を網羅的に調査し、各論理学派の手になる現存著作を同定した。さらに、1120～1200頃までに書かれた論理学著作で当時の論理学者の名に言及した部分を網羅した資料集を編んだ。（以上の成果はホームページ上に公表した）。上記資料集に基づいて、晩年のアベラールとパリのアルベリックの間にかなる論争があったかについて、コペンハーゲンの学会で報告した。（同成果はすでに公刊されている）。

研究成果の概要（英文）：I have made a research for all the known extant 12th century logic texts, large part of which are still unedited, and make a list of works written by each logic schools of the period. I have compiled a list of all passages referring to logic masters of the day by name. (These results are published in my site). Based on the aforementioned list, I read a paper in a conference at Copenhagen on the disputes between the old Abailard and Alberic of Paris, the Abelard's bitterest opponent. (The paper is already published).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：西洋12世紀論理学

1. 研究開始当初の背景

12世紀論理学テキストは、いまだその大部分が未刊のままである。岩熊はこれまで30年余にわたって12世紀論理学未刊著作の校訂・研究に携わって来た。その過程で、12世紀論理学が諸学派の対立論争のもとに発展してきたことを明らかにして来た。世紀

前半において *vocales / reales* と呼ばれる2学派が対立していた (*vocales* とは、12世紀論理学者のうちでこれまでもっとも研究が進んでいるアベラールに始まる学派である)。世紀後半においては、*vocales* が *nominales* と呼称が変わり、さらに *reales* は *Parvipontani / Albricani / Porretani /*

Melidunenses の4 学派に別れていた(いずれもパリのアルベリック他のアベラールに対立した論理学者達に始まる学派である)。個々の論点について各学派には特有のテーゼを唱えて、互いに批判を展開していた。以上のことは大筋ですでに明らかになっていたが、各学派の詳細な主張および諸学派間でいかなる論争がなされていたかについては、いまだ断片的に知られているのみである。12 世紀論理学現存写本を総覧して全面的に検討した研究は未だないし、各学派の手になる諸著作についての情報は個々の写本に関する研究に散見するものの、それらの著作の大部分が未刊のままで残されているからである。

したがって、これまでの研究を集大成し、さらに現存全写本を対象として、それら著作のうちのどれがどの学派の手になるものであるか、を明らかにする必要性を痛感していたのが、本研究開始の背景である。

2. 研究の目的

(1) 8 世紀後半から12 世紀に書かれた現存論理学著作を総覧する。

(2) 12 世紀論理学者の固有名に言及したテキストを総覧する。

(3) 12 世紀各論理学派について、現存テキストのうちどれがその著作であるかを同定する。

3. 研究の方法

(1) 8 世紀末から12 世紀末までに書かれた論理学著作を含む諸写本を探索し、そのマイクロフィルム・コピーを入手する。(大部分は申請時点で既に入手済みであったが、その欠を埋めてより完全を期した)。

(2) 上記マイクロフィルム・コピーにより、各写本に書写された著作を同定し、各著作を予備的に読む。(これも申請時点で既にかなり進んでいたが、これまでに知られる1000 余部の写本についてほぼ完了した。内12 世紀論理学著作を含む写本は100 余部におよぶ)。

(3) 上記(2)に述べた既読の諸著作から、各論理学派の手になるものを同定する。その場合の問題点は以下にある。12 世紀論理学著作のばあい、自らの主張をなす場合は通常「Nos dicunt (我々曰)」、批判対象に言及する場合には「Quidam dicunt (或人曰)」というのみで、批判対象の固有名に言及することは少ない。したがって、まずそれら固有名に言及した場合をリスト・アップする必要がある。学派名への言及についてはすでにそのリストを公刊している(Iwakuma Y. & S. Ebbesen, 'Logico-Theological Schools from the Second Half of the 12th Century: A list of Sources', *Vivarium* 30 (1992),

pp 173-215)。

本研究では、さらに、各論理学者の固有名に言及したテキストを網羅したリストを作成する。

以上の準備のもとに、以下の方法で各論理学はの手になるものを同定した。

①各著作について、各学派に特有な既知のテーゼを含むか否かを確認する。

②上記①で特定学派の手になると確認された著作と同じ主張を含んでいるか否かを、他の著作について確認する。

③その他、各著作中で言及された論理学者・学派名そのほか様々な根拠に基づいてどの学派の著作であるかの同定を行う。

4. 研究成果

(1) 8 世紀末から12 世紀末までに書かれた論理学現存著作についてこれまでなされた研究を集大成した。調査した関連写本は1000 余部におよぶ(内、12 世紀論理学著作を含む写本は100 余部、研究者にこれまで知られていなかった写本も含む)それらの成果はサイト (<http://www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/>) でインデックス化されている。

(2) 上記(1)の各写本に含まれる論理学著作の大部分を予備的に読んだ。それらの校訂テキストも同サイトに順次公表していく予定である。

(3) 上記(1)で総覧した各著作について、各論理学派の手になる現存著作を同定した。それらの結果は同サイトのページ (<http://www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/indices/MastersSchools.html>) に整理公表されている。以上は、各学派の著作集成を編むという今後の研究の準備となる。

(4) 1130 年頃から1200 年頃までに書かれた全論理学著作から、12 世紀論理学者の固有名に言及したテキスト(21 写本37 著作)を網羅したリストを作成した。(同サイトのページ (<http://www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/papers/MastersII.pdf>) に公表)。これらは、各論理学者の唱えた説についての今後の詳細な研究の基礎となる。特に、アベラール晩年の最も強力な反対者として知られるパリのアルベリックの教説について、多くの新知見を含んでいる。

(5) 本研究の成果のうち唯一印刷されたもの(下記拙論、同サイトのページ <http://www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/MyArticles/Iwakuma2013.pdf> としても公表)では、晩年のアベラールとパリのアルベリックの間に戦わされた様々な論点にかんする論争について概説した。晩年のアベラール自身の手になる著作は現存しないので、この時期のアベラールの考えを批判者の視点から明らかにした事は、アベラール論理学研究に新しい資料を提供した事になる。

同論文の主要な内容を以下の通りである。

①まず、岩熊の新発見になる De sententia magistri nostri Alberici (我々が教師アルベリックの教説について、オーストリア国立図書館所蔵写本 VPL 2 2 3 7, f. 3 1 r 所収) というテキストを校訂した。ここには 14 のテーゼが (パリの) アルベリックのものとして挙げられている。これらのテーゼはいずれも、従来 Albricani の名で知られていた学派の教説集であることを示した。(30-35 ページ)。

②アベラールのいわゆる「唯名論」にたいする強力な反対者であったパリのアルベリックの普遍についての教説を諸著作にもとづいて示した。あわせて、12 世紀後半の普遍をめぐる論争は、有名な世紀前半の論争とは性格の異なるものであることを示した。(35-38 ページ)。

③晩年のアベラールとパリのアルベリックの間では、よく知られている普遍論争のみならずその他の多くの論点でも論争が戦わされていたことを示した。その第一は、実体カテゴリーの分類をめぐる論争である。従来はアリストテレスに従って、「実体 Substantia」は「物的実体 Substantia corporea」と「非物的実体 Substantia incorporea」に分割されていた。それに対して、次のようなあらたな「実体」分割が提唱された。「人間」という実体は、身体という「物的実体」と魂という「非物的実体」からなるものであるから、「人間」は「物的実体」にも「非物的実体」にも属さず、「混合実体 substantia mixta」に属する。Albricani 学派に属する多くの著作によれば、アルベリックは従来の説を採用し、後者の説をアベラールに帰したうえで様々な批判を加えていた。「混合実体」をめぐる論争は、しかし、11 世紀後半以降に始まった論争であり、非常に複雑な過程をたどっており、若い頃のアベラール自身の著作によれば、彼は必ずしも「混合実体」説をそのままに唱えていたわけではなく、むしろ敵対者のシャンポーのウィリアムが唱えていた説をアベラールも取り入れていたにすぎない。12 世紀中葉以降になると、そのような歴史的経緯は忘れられて、「混合実体」説はもっぱらアベラールの説として攻撃されるようになっていたことを示した。(38-40 ページ)。

④Quaestiones de syllogismis(三段論法についての疑問集、オーストリア国立図書館所蔵写本 VPL 2 4 8 6, f. 3 8 rb-vb 所収)を主要な典拠として、晩年のアベラールとアルベリックの間では、定言三段論法をめぐる、多くの論点で論争が繰り広げられていたことを示した。12 世紀初頭のシャンポーのウィリアムは論理学の領域として、語のレベル・文のレベルという二つの主要領域がある

と唱えた。

そして、三段論法は文のレベルに属しており、「もし<第一前提>なら、もちろ<第二前提>なら<結論>である」という仮言文であると解釈した。アベラールは、それに対して、三段論法を、ボエティウスの言う通りに「<第一前提>、<第二前提>、従って<結論>」という複数の文からなる第三の領域をなすものとして区別した。

また、シャンポーのウィリアムは、三段論法を基礎づけるロクス(主語のロクス・述語のロクス・前件のロクス・後件のロクス)を導入した。

これらはいずれもロクス論の典拠であったボエティウスの De differentiis topicis には見られないものである。それにたいして、アベラールは、三段論法の妥当性は、名辞の配置(coplextio syllogistica)によるものであって、ロクスによって根拠づけられるものではないと批判した。これらのアベラールの新機軸は、しかし、12 世紀中葉以降も批判者達が採用するところとはならず、基本的にシャンポーのウィリアムの説が踏襲されていた。三段論法をめぐる論争について以上の歴史的経緯をあきらかにした。(40-43 ページ)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

岩熊幸男、"Alberic of Paris on Mont Ste Geneviève against Peter Abelard", *Logic and Language in the Middle Ages*, 2011 年 6 月 22-24 日
コペンハーゲン (デンマーク)

[図書] (計 1 件)

Logic and Language in the Middle Ages: A volume in Honour of Sten Ebbesen, Jakob Leth Fing, Heine Hansen, Ana Aria Mora-Méarquez (ed.), Leiden/Boston: Brill, 2013

(同書 27-47 ページに岩熊の手になる論文 "Alberic of Paris on Mont Ste Geneviève against Peter Abelard" が掲載されている)

[その他]

ホームページ等

<http://www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩熊 幸男 (IWAKUMA YUKIO)
福井県立大学・学術教養センター・教授
研究者番号：10135600

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：